Y16b　地域密着型サイエンスカフェの試みとその評価

○浦川 聖太郎 (日本スペースガード協会)、西山 広太 (日本スペースガード協会)、田中 博春 (日本スペースガード協会)、高橋典嗣 (明星大学、日本スペースガード協会)

研究活動のアウトリーチ手法としてサイエンスカフェが注目されている。最近では毎週のように各地でサイエンスカフェが催されており、広く一般に認知されつつある。サイエンスカフェの開催形式は多種多様であり、必ずしも定まった形があるわけでない。今回我々は、地域密着型のサイエンスカフェを試みた。ここで我々が目指した地域密着型のサイエンスカフェとは、天文施設周辺の地域住民を参加対象とし、参加者が聴衆として参加すると同時にボランティアスタッフとして運営を行うものである。このような形式のサイエンスカフェにすることによって、大学や公の科学館と異なり、運営スタッフの人数が限られる地方の天文施設においても、サイエンスカフェの実施が可能になる。さらに、主体的な参加者を育て、ボランティアスタッフが次回以降のサイエンスカフェの主催者となるような草の根の活動に広がることが期待できる。今回のサイエンスカフェは岡山県井原市美星町において 2007 年 11 月に開催し、20 名の参加者 (内 5 名がボランティアスタッフ) を集めることができた。施設周辺住民への宣伝、住民の参加は十分とは言えなかったが、一方で地元に存在する天文への興味関心が少なからず住民の方々に存在していることも分った。地方でのサイエンスカフェの開催は、人口が少ない点、会場までの交通アクセスが限られる点など都市部での開催に比べて不利な要素がある。そのため、宣伝を周知し地元天文施設への興味関心をいかに引き出せるかが今後の継続的な成功の鍵となると考えている。そのためにもボランティアスタッフの力を育てて行くことが必要不可欠であると考えている。2008 年も 2007 年に引き続き、地域ボランティアスタッフと協力したサイエンスカフェの準備を行っている。本講演では、2007 年〜2008 年に行った 2 回のサイエンスカフェの実施報告とアンケート結果にたいする評価を行う。